

# 地域に根ざした介護福祉士養成の実現

## — 地域交流事業をととして —

### Toward the Realization of Community-based ‘Certified Care Worker’ Training — Through Exchanges with the Local Community —

布施 千草    山田 純子    但野 正弘    宮下 裕一    古川 繁子  
松本 幸枝    井口ひとみ    斎藤 代彦    今井 訓子    清宮 宏臣

**要旨：**「地域」を理解するためのニーズ調査を、社会福祉協議会職員を中心としつつ、民生・児童委員や近隣社会福祉施設職員に対して行った。その分析を通して地域ニーズの把握と新たな教育プログラム開発への基礎的データの収集が出来た。その結果、学外者と本学学生との関わりは、学生にとってより豊かな人間関係を経験する場であることがわかった。また近隣地区の実態・福祉ニーズ調査の結果、改めて本学が提供できる機能が明らかになった。

また、高齢者のニーズは想像以上に活動的であることから、ことぶき大学校生による歴史散歩、社交ダンスなどのサークル活動や絵画作品展示活動等へ参加する形を通して、高齢者と学生との時間の共有を試みた。

加えて、これらの活動への参加も含めた、学内外での学生の活動を映像・画像データとして蓄積中である。それらのデータの整理編集後、学生の2年間の学びのイメージ化にも利用予定であるなど、「地域に根ざした介護福祉士養成」に必要とされる教育プログラムの拡充と新たな開発を目指した試みの整理を行った報告である。

**Key Words：**地域、介護福祉士教育、福祉ニーズ

---

## 1. はじめに

本学が開学してまもなく8年が経過しようとしている。その間、介護保険制度の施行、改正があり、介護福祉士に求められる専門性も拡大、深化してきた。特に平成18年の新介護保険法

施行にあたってのキーワードのひとつとして「地域」があげられる。これは高齢者が住みなれた地域で可能な限り住み続けることができるようなシステムを作り上げることでもある。

このような状況下にあって、本学は介護福祉士養成校としてどのような教育を学生に対して行っていくべきなのか、その試みについての整理を行っていくことになり、地域介護福祉専攻所属教員が協力して研究に取り組んだ。

本研究は主に2つの柱から成り立っている。一つは本学が位置する若葉地区における、主に高齢者をめぐる福祉ニーズ把握のための実態調査を行い、その結果を基に、地域のニーズに合った学生の福祉活動や本学において今後取り組むことのできるプログラム開発など、これからの地域交流のあり方を探ろうとするものである。もう一つは、これまでのことぶき大学校と本専攻教員との関わりを契機に試みられた、ことぶき大学校生と本学学生との共同事業の試みについてである。

これらの試みを基に、今後の介護福祉士養成プログラムについての検討を行っていくことにしたい。

## 2. 若葉地区における老人世帯の福祉ニーズの実態調査とサービスメニュー開発

### 2.1 はじめに

平成16年11月13日に本学園は創立100周年を迎えた。学園の100周年記念事業の一環として、地域交流事業を計画し、近隣の千城台東南地区のミニデイサービス「ふれあいサロン」に年間を通して学生がボランティアで参加したことが、実際的な地域交流の端緒となった。

ふれあいサロンへの学生参加は毎年の恒例事業として今年3回目を終え次年度に引き継がれる。学生を地域活動に参加させる中で、若葉区の社会福祉協議会や小倉地区部会・千城台東南地区部会の民生・児童委員と本校との関係作りができてきた。

平成17年度には、社会福祉協議会職員と小倉地区（第403地区）民生・児童委員会の方が本校学生に向けて、本校が所在する若葉区小倉地区の社会福祉協議会の働きと民生・児童委員活動について講演を行った。さらに、平成16年度からはじめられた小倉地区ミニデイサービス「ふれあいいきいきサロン」に学生ボランティアが参加することが出来た。

平成18年度には本短大にごく近い距離のところに社会福祉法人シャローム若葉が第2デイサービスとグループホームを開設し、本校卒業生がデイサービス主任として就任していることから、地域交流の幅をさらに広げたいと計画中であった。

このような経過を踏まえて、本年共同研究として今までの地域交流のあり方をまとめ検証し、これからの地域交流のあり方を調査することが本研究の目標とするところである。

## 2.2 若葉区小倉町の実況

若葉区と小倉町の人口と高齢化率は以下のとおりである。

### ○人口

若葉区 149,554人

小倉町 4,085人（平成18年3月31日現在）

### ○高齢化率

若葉区 17.7%

小倉町 13.0%（平成16年12月31日現在）

（但し、小倉台地域に限れば 25.0%（平成18年4月1日現在））

また、平成18年度～22年度にかけての若葉区地域福祉計画によれば、若葉区小倉町地域の社会資源として以下のものが挙げられている。

植草学園短期大学・市立小倉小学校・小倉台保育所・柏戸デイサービスセンター等

なお、若葉区内の地域包括支援センターは、ちば美香苑・シャローム若葉が請け負っている。

小倉地区部会（第403部会）は民生・児童委員19名と主任児童委員2名で構成されている。

（小倉地区部会は小倉町と若松町の一部を含んでいる民生・児童委員の活動地域である）

### 参考資料：若葉区小倉地区（第403地区）の高齢者の状況

（平成18. 5. 31現在）

年 齢	高 齢 者 数
60～64	683
65～69	904
70～	1,798（うち90歳以上72）
計	3,385

生活状況（65歳以上）	
高齢者二人所帯	493
高齢者を含む所帯	994
ひとり暮らし高齢者	266
入 院	30
入 所	57

## 2.3 本調査の目的

### ○本調査の目的：

地域ニーズを把握していると考えられ、地域ニーズに対してデイサービスやふれあいサロンなどの地域サービス活動を既に実施されている代表者にインタビュー調査を実施

して、地域ニーズとサービス利用状況についての現状を把握する。

また、地域介護福祉専攻のある本校の特色を生かした地域との連携を模索する。これからの地域交流のあり方 ― 地域が求めていることと短大ができることの接点を見出す。

また、本学において地域ニーズに合った学生の福祉活動や本学で取り組めるプログラム開発を展開するための基礎とする。

## 2.4 研究方法

インタビューによって地域ニーズを探る。地域ニーズの中で本学で取り組めるプログラムがあるかを知る。学生がどのような形で参加出来るか可能性を探る。そのために以下の研究計画を立てる。

### ○インタビュー実施計画：

平成18年5月……………シャローム若葉第2デイサービス主任 矢嶋富美子氏

平成18年5月……………千葉市社会福祉協議会若葉区事務所 長谷川由紀氏

平成18年5月……………千城台東南地区地域福祉推進委員 斎藤桂子氏

平成18年6月ないし7月……………小倉地区部会民生児童委員19名

平成18年8月から9月……………インタビュー結果の分析・集約

### ○授業との関連

1年生：高齢者福祉論において、千城台東南・金親地区部会主催のふれあいサロンに学生が参加

## 2.5 インタビュー結果

### ① シャローム若葉 矢嶋富美子氏（平成18年5月19日）

シャローム若葉は平成18年から始まった地域包括支援センターを受け持っており、本学の卒業生である矢嶋氏が主任・生活相談員をしている。そこで地域のニーズを知るためのインタビューを行った。

### ○シャローム若葉について

千葉市単独型デイサービスセンターとして平成6年に竣工された。プロテスタント系キリスト教の社会福祉法人三育ライフを経営母体になっている。千葉市には現在桜木本部、区役所前、若松の3ヶ所が開所されている。シャローム若葉は本学の近くに位置し、平成17年に第2デイサービスとして開所された。利用者の登録人数は150名で、状況は要支援から要介護5までの方がおられ、平均介護度は約2である。平均年齢は80.8歳で週1回から週5回利用される方がいる。

#### ○介護保険改正後の現状について

口腔ケアと栄養アセスメントは月2回行えば100単位の報酬で、口腔ケアは歯科衛生士が行い、栄養管理は管理栄養士又は栄養士が行う。

リハビリテーションを行うには2泊3日の研修を受け、トレーナーの資格が必要である。理学療法士、作業療法士、看護師が行う。

介護予防ではケアマネージャー1名につき35名までを担当することができる。現在要介護1の対象者は要支援2になると考えられる。そこで地域包括支援センターの介護予防対象者の半分である、800名～900名の利用者が来るだろうと考えていた。そのためほかのケアマネージャーに多少のケアプラン作成をお願いできたとしても、かなりの負担があるだろうと予想していた。しかし実際に利用している方はそのうち11名である。今後は増えると考えられる。

デイサービス利用について、以前近隣のニーズ調査をした結果ニーズは多いと考えられた。また、実際見学者は多かったが、小倉から通っている方は3名にすぎない。これは近所の方の目を気にして近くの施設を利用しないことが原因と考えられる。

一方、同じ法人によるグループホーム「虹の家」は9人2ユニットが満床の状態である。

#### ○職員のニーズについて

若い職員は長続きしない。企業が経営するデイサービスやグループホームに転職していくようである。

#### ○今後の計画について

本学との連携について、学生のボランティア活動を進める。ボランティアコーディネータの栗山氏と打ち合わせをする。

### ② 千葉市社会福祉協議会若葉区事務所 青木所長、長谷川氏（平成18年5月26日）

研究の進め方を決めるにあたり、若葉区全体の理解を深め、民生・児童委員との関係を築くために地域福祉政策の中心となる社会福祉協議会の活動を伺い、調整をお願いする。

#### ○若葉区地域福祉計画について

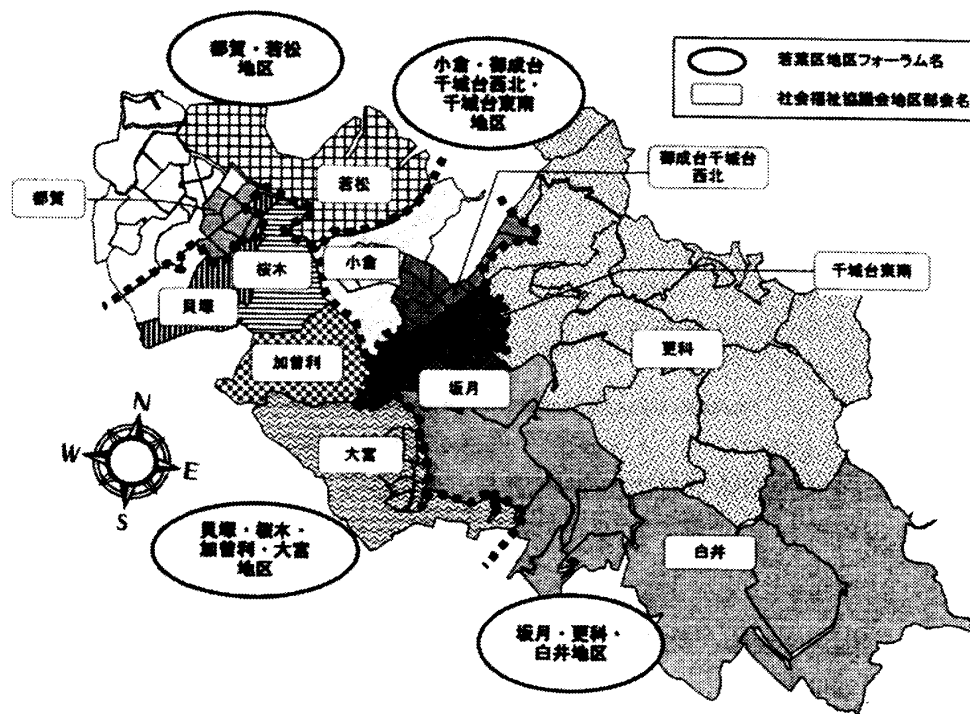
千葉市では社会福祉協議会の策定した地域福祉活動計画とは別に平成18年3月に平成18年～22年の計画が策定された。これは平成12年の社会福祉法の改正により「市町村地域福祉計画」として位置付けられている。若葉区を4つの地区に分け、夫々の地区にフォーラムを設置した。短大は「小倉、御成台、千城台西北、千城台東南」に地区に含まれる。基本方針は①交流・近隣関係②身近な生活支援③安全・見守り④相談・情報⑤福祉教育・人材育成の5点である。

## ○若葉区の現状

若葉区は千葉市の東北部に位置し、6区の中で最大の面積を有する区である。人口については、昭和30年代後半の大宮台、小倉台の住宅開発をはじめ昭和40年代の千城台および都賀駅周辺市街地の開発、昭和50年代のみつわ台等住宅団地の開発により、首都圏のベッドタウンとして人口が増加したが、近年では、まちの成熟とともに人口が減少化の傾向を示している。若葉区の人口は他の5区が増加しているのと同様に、5年前に比べ2,200人減少している。年齢別人口では65歳以上の高齢者人口が5年前より、5.1%増で高齢化の進行が顕著である。特に高齢化率は平成17年に18.9%で市内で最も高い状況である。

平成18年の高齢化率は千葉市全体で16.5%、若葉区では19.5%である。しかし、大宮台2丁目に限ると45.3%に至っている。

《若葉区地区フォーラム区割り図》



## ○小倉・御成台・千城台地区の現状

小倉地区の敬老会には約400名参加し、そのうち80歳以上の方は約30名（90歳以上はその中16名）であった。

小倉地区の民生・児童委員は地区別に19名、その他主任児童委員2名の計21名で構成されている。自治体とは別に民生児童委員の受け持ち区域が分けられている。中には

200名の高齢者がいるところもあり、受け持ち地区によって特徴がある。小倉台は比較的元気な方が多い。小倉地区は提供する人と受ける人の両者あり、中には地区部会で活動している女性の義母が利用者ということもある。千城台は市営住宅で、障害を持った方や、一人暮らしの方がいて、困っているという印象もったことがある。千城台東南の方は、自分たちは利用する側にはならないと考えているようである。住民が相互に支えあう、援助しあう関係作りはこれからである。

#### ○ボランティア活動について

学内センターの創設など、淑徳大学にあるように学校が率先して行わないと難しい。学校の設備や人材を生かしたい。ボランティアコーディネーターは教員が行う。また、トレンド的話題を提供する講習会や公開講座を開くなど地域と結びつくことができる。

### ③ シャローム若葉 栗山氏（平成18年6月9日）

本学の学生ボランティア活動を計画するに当たり、施設の希望や見学日程を調整する必要がある、担当者に話しを伺った。

#### ○ボランティア体験について

「人数を少なく、日程を長く」が望ましい。デイサービスは9時から15時30分までで、グループホーム虹の家は24時間対応。入居者はグループワークができる程度で、受け入れがよく、「教えてあげたい」という気持ちを持っている。時間は30分でもよい。まずは講義の合間にちょっと会いにきたという感じで行ってほしい。

ボランティアをする時は誓約書にサインをしてから、となるので希望者は登録が必要である。また、年間行事の時のボランティア活動がありがたいし、やりやすいと思われる。誕生会は各月2週目か3週目に行われる。9月4日は敬老会でその前に顔合わせをしたい。30分くらいのレクを計画してほしい。10月は紅葉狩り、1月には千葉神社への新春ドライブがあるので、活動してもらいたい。

まずは学生全員を4グループに分けて、オリエンテーションをしていただくことになった。（7月11日13：30・12日13：30・12日15：00・25日15：00）

また、教員に何ができるかを検討することになった。

### ④ 若葉区千城台東南地区のふれあいサロン担当者との話し合い（平成18年6月30日）

本学にて、斎藤桂子氏（ふれあいサロン担当者、元民生・児童委員、地区担当、社協地域推進運営委員）、西尾氏（ふれあいサロン責任者）と本学教員3人で話し合いをもった。テーマは学生が参加しているふれあいサロンと今後の東南地区と短大の交流についてである。

### ○ふれあいサロンについて

現状：ふれあいサロンは民生・児童委員活動として、70歳以上の高齢者を対象に年12回開催されている。本学学生は、平成16年度から地域の元気な高齢者とのふれあい体験をすることを目的に年6～8回出席している。高齢出席者は今度は何を話そうと考えたり、学生とのふれあいを楽しみにしている。若い者が知らないことを教えてあげていると思っている。学生が自分たちのためにボランティアをしているとは思っていない。サロンに参加する高齢者はサロンでの交流はとても楽しみにしているが、その他の時間に自発的に交流することはないとのことである。

所見：ふれあいサロンに学生が参加することを通して東南地区と本学の関係ができてきており、意義がある。学生はまだ未熟であり、ボランティア体験というより、高齢者とふれあう体験をさせていただいている、という実態であることがわかった。高齢者は、学生の参加を楽しみにしているだけでなく、高齢者同士の月1回の交流の場となっており、参加者全員にとって意義ある交流となっていることがわかった。

### ○千城台東南地区の地域活動

現状：この地域は地域活動が活発な地域である。ふれあい食事サービス（高齢者給食宅配）、土曜ひろば（小学生対象）、家庭介護者の集い、シクラメン販売（コミュニティセンターで）、御成街道を歩く会（中学生）、凧作り、わらじ作り、新聞（色刷り）でブローチ作り、三味線、太鼓（みつわ台は有名）、ボランティアグループ（たんぽぽの会・だだちゃの会）、孤独死対策、地図づくり、サロン委員会などがある。

所見：多くの活動が民生・児童委員等によってなされていることを知った。これらの地域活動を本学はもっと知る必要がある。その中で本学が関わることがあるかもしれない。例えば、孤独死対策、こどもに対する活動などがある。また、地域の方から「技」を教えていただくこと、例えば、凧やわらじ作り等、もできそうである。

### ○その他の本学と地域の交流

教師が地域の活動をもっと知ること、例えばワークホムの活動が挙げられた。

また、教師が提供できるメニューを示し、出前講座などを行うことができるだろう。

ネットワーク委員会とはどんなものか、短大はそこでどう関わられるかを検討する余地がありそうである。



⑤ 民生・児童委員 中谷氏、社会福祉協議会 長谷川氏（平成18年7月4日）

地域のニーズ調査の結果をうかがい、民生・児童委員の方との関係を築くためにどうすればよいか検討した。その結果、若葉区の民生・児童委員会議に参加させてもらうことになった。

○小倉地区の健康調査結果

5月に調査を行い、7月に結果集計が出る予定である。そこで8月に民生・児童委員会合に参加させていただくことになった。その調査内容には地域に住む65歳以上全員と60歳から65歳の寝たきり状態の方を対象に高齢者のニーズ調査と介護認定を受けているかどうかの調査がある。

○デイサービスの利用について

シャローム若葉の利用が3人と少ないのは、元気な人は元気で利用の必要性が低く、具合の悪い人は家の中に閉じこもっているか、または入院・入所しているからと考えられる。また、シャロームのほかのデイサービスへ行っている方が多いことが考えられる。

昨年10月にはグループホーム「あいの家」が開所され、3名が利用している。ここはデイサービスがないが、地域の人に理解してもらおうという姿勢が見られる。そこで、30分くらい話し相手になるという活動が求められている。

小倉地区部会ミニデイサービス「ふれあいいきいきサロン」は毎月第4水曜日又は第4木曜日に行われている。8月24日に学生ボランティアとして佐原雛子を行う予定である。またニーズについては話を聞いてもらうことであると推測できた。そこで傾聴ボランティア講座開催を検討することになった。

⑥ 小倉地区（第403地区）民生・児童委員・主任児童委員との懇談会（平成18年8月5日）

若松公民館にて、民生・児童委員17人、主任児童委員1人、本学教員2人が出席した。民生・児童委員の定例会合の後に設定された。小倉地区（第403地区）とは、小倉台1丁目～7丁目、小倉町、若松町（一部）を担当しており、本学もその地区にある。

会の内容は、まず、本学教員が当日の懇談会の趣旨説明を行い、次に第403地区の19地域について担当民生・児童委員から地域の特徴や現状の報告および、主任児童委員からは全体的な報告があった。最後に意見交換をした。

○懇談会の趣旨説明

まず、本学の地域との今までのかかわりの説明（いきいきサロン、百周年記念事業、学園祭招待）をした。次に今回、本学の学生・教員・施設が地域と共に、または地域のためにできることは何かを探り、実行したいという地域介護福祉専攻の共同研究につい

て説明した。その一環として、シャローム若葉のニーズ調査からわかったことを簡単に説明した。また民生・児童委員が5月に実施した健康調査の結果や担当地区の様子を伺うことと、本学と地域の交流について意見交換をしたい旨伝えた。

#### ○民生・児童委員から地域の特徴と現状、主任児童委員から全体報告

19地域について担当民生・児童委員から報告の概要は次のとおりである。

第403地区は、戸建ての多い地域と公営アパート地域では特徴が異なる。民生・児童委員がかかわる内容は高齢者のこと、障害者のこと、不登校の児童のこと、外国人のことが挙げられた。

##### \*戸建ての多い地域（14地域）、主に高齢者のこと

高齢化が進んでいる。戸建ての多い地域は全体的には落ち着いている。

家族と生活している人が多く、高齢者を家族が世話している。家庭的・経済的に落ち着いている。

独居である人も多いが、知的レベルの高い人が多く、教わることが多い。自分のことは自分でしている。ほとんどの人が自力で食事づくりしている。しかし、独居の男性は食事に困っており、配食の利用者がいる。

介護保険制度の開始した時に、ずいぶん利用を勧めたが皆消極的だった。しかし、医者からの勧めで利用するようになった人は多い。現在は多くの人がホームヘルプサービスやデイサービス、ショートステイ、施設入所など介護保険を上手に使っている。例えば90歳の方は、1日1時間のヘルパー利用をし、食事づくりをしてもらっている。90歳台の2人の方は半年前に2人とも施設に入所され、無人の家になったので、家の見回りをしている。

地元のS施設のデイサービス利用が少ないのは、ショートステイがないことも原因ではないかと思われる。一方、I施設はショートステイがあり、デイサービスからショートステイに移行できるから安心であると人気がある。具合が悪い時にはショートステイが長く利用できるのよい。ここから少し遠い大宮台の施設に入所した方は、地元の施設入所は近くて抵抗があるのかもしれない。

戸建てが多い地域に、最近、家賃の安い小型マンションができ、生活の苦しい人が多く入居し、生活保護の対象になる人が増えている。

##### \*公営アパートの地域（4地域）

様々な問題を抱えている家庭が多い。老人は少ないが、その他の問題がある。母子家庭や生活保護家庭が多い。なかなか会えない。隣近所付き合いが少なく、表札を出さなかったり、ベルを切っている家が多い。訪問時は戸を叩くが、大きな音・声は控えている。地域の方は「民生委員がどこに行くか」興味津々で見ているので、訪問時

は「民生委員」とは名のらない。

孤独死を初めて経験した。生活保護対象者でパチンコしている人がいて、少し強く注意したこともある。母子家庭が多いが相談にのことは少ない。しかし、多くの人がさみしく、生活不安をかかえている。保護の書類の関係で接することは多い。不登校児童がいる。母親の仕事の関係で訪問は夜遅くなるが、2学期から登校するよう働きかけている。

**\* 1つの自治会でまとまっている地域（1地域）**

この地域は前述した「戸建ての多い地域」にも入るが、他地域と異なる特徴があるので、取り上げた。民生・児童委員は町内会長歴が8年ある。2所帯住宅が多い。大きな問題はない。愚痴を聞いてあげるくらいである。

4年前敬老会がなくなりかけ、年10万円の助成を受け老人クラブを設立した。地域内にある公民館を利用して活動している。サークル（ウォーキング、グランドゴルフ、輪投げ、カラオケ、おどりなど）がある。スポーツは年2回大会をし、日帰りバス旅行年2回。地域のよい交流になっている。

**\* 障害のある人について**

高齢の母親が入院したがその家庭には、鬱の兄（40代）と知的障害のある弟（30代）の2人の息子がいる。兄はリストラにあい現在は在宅であり、時に大きな声をだす。弟は知的障害者の授産所に通所している。財産があるので生活保護の対象ではないが、3人に要保護所帯慰問金を支給している。兄は弟を心配し、一緒に住むことを希望している。野菜を持って時々訪問している。

母・息子とも精神障害がある家庭があるが、福祉の人とは話したくないと会ってこない。息子はかつては会社勤務をしていた。70代の知人を父親のように思い親しくしているので、その人に様子を聞くと、「パトカーに追われている」と言うとのこと。回覧板渡しも町内会費徴収もできないでいる。

高齢女性（90歳以上、入院）のお嫁さんが若いときから心の病気がある。訪問しても出てこないことが多い。健康調査の時にはどなられ、恐怖を感じたので、敬老祝いを届ける時には保健福祉センターの人と一緒に配る予定である。病気は重くなっているようである。

その他にリウマチの方（50代）、人工呼吸器使用の方（接触がとれない）、鬱かなと思われ保健福祉センターに連絡し訪問依頼している方複数名、障害者手帳4級で一人暮らしの方（デイサービスと、ヘルパーを利用）等が挙げられた。

**\* 外国人・帰国子女**

生活保護を受給している、日本人の夫と離婚して、子どもは夫がひきとったために、

2年前から不法滞在となった外国人籍の方がいる、まもなくビザがおりる、日本語は話せるが名前は書けない。

中国の離散家族で独居の人に世界文化遺産の資料持参しているが、喜ばれている。

**\*主任児童委員の報告**

年数回、保育園、学校と連絡をとっている。長期の休みの前には学校と話し合いを持っている。保健センターとは月1回若葉区全体の会合がある。担当の民生・児童委員と協力している。

**○意見交換**

**\*民生・児童委員と町内会長との連携・連絡について**

民生・児童委員には守秘義務がある。しかし町内会長によっては民生・児童委員の仕事を理解していない人も多く、情報の提供を望まれることが多い。小倉台は比較的スムーズに連携が取られているが、公営アパートは難しい。町内会が全てに干渉する積極性は困る。

**\*敬老会と老人クラブについて**

敬老会開催費用として市から1人につき830円の委託料が出ている。民生・児童委員が招待状を渡し、出欠をとる。小倉小学校で、昼食とイベントを用意する。11時から13時30分くらいの時間に行われる。欠席者には700円の地域限定の商品券をお渡ししている。小倉台と若松には老人クラブがあり、独自に敬老会を実施している。

**\*障害者のいる所帯について**

障害者のいる所帯が親の高齢化によって問題が顕在化してきている。

知的障害と精神障害のある人のグループホームの利用者はいないが、高齢者のグループホームとの混同があり、民生・児童委員の理解もあまりなかった。

障害者自立支援法の利用料の負担の問題がでてきている。親に所得がある場合には、世帯分離という方法がある。役所は勧めないが、世帯分離して、生活保護を受けることはある、など教員から情報提供した。

学校卒業後の働く場がすくないこと、障害があまり重くない中間の人のサービスのないことが挙げられた。

**\*今後の本学と地域との交流について**

**○今回のような懇談会の開催について**

1、2年に1回でもあるとよい。本学教師の専門的な知識を得る機会になるのもよい。

**○本学の施設および教員の専門性の活用について**

・本学の調理室の活用ができないか。男性に調理の必要性が出ている。男女問わず、調理し、本学と地域の交わりの場になってもよい。

- ・教員が出前講座をする。教員が提供できるメニューを挙げておくといいたい。
  - ・公開講座は、本学に来ていただく機会になる。地域のニーズに添うテーマがよい。
- 傾聴ボランティアについて計画したい。

○学園祭に参加していただく。学園祭のパンフの配布をもっとしたらよい。

その時本学の見学会を開催するとよい。

○地域住民の方がもっている特技を学生に伝える講師になっていただく。

お花、俳句など学生に教えることもある。

○民生・児童委員が行っている友愛訪問に学生が同行をする。

学生と一緒に話しがしやすいかもしれない。

○いきいきサロンの参加

8月24日、学生が参加し、佐原雛子を演じる。

### 地域別高齢者の状況

平成18.5.31現在

地域		60歳以上 計	60～64歳	65～69歳	70歳～	備 考	
						90歳～	独 居 (60歳以上に 占める%)
1	小倉台1丁目	215	43	43	129	5	9 ( 4.2)
2	2	147	22	31	94	4	13 ( 8.8)
3	3 北	269	40	79	150	5	12 ( 4.4)
4	3 南	283	46	97	140	4	19 ( 6.7)
5	4	196	27	45	124	3	17 ( 8.7)
6	4 公営ア	110	20	31	59	3	25 (22.7)
7	4 公営ア	137	18	54	65	0	29 (21.2)
8	4 公営ア	76	17	22	37	1	22 (28.9)
9	5 公営ア	62	20	24	18	0	6 ( 9.6)
10	5	199	26	58	115	3	19 ( 9.5)
11	6 半分	178	31	34	113	9	16 ( 9.0)
12	6 半分	174	24	35	115	6	12 ( 6.9)
13	7 南	254	31	63	160	8	14 ( 5.5)
14	7 北	199	31	38	130	3	11 ( 5.5)
15	小倉町短大奥	159	48	44	67	4	7 ( 4.4)
16	小倉町短大周辺	205	66	56	83	6	8 ( 3.9)
17	小倉町	175	62	50	63	0	11 ( 6.3)
18	小倉町・若松	164	44	44	76	5	8 ( 4.9)
19	若松	183	67	56	77	3	8 ( 4.4)
計		3,385	683	904	1,798	72	266 ( 7.9)

公営アパート以外は戸建て

今回の懇談会によって、小倉地区の実態が明らかになった。具体的な情報により理解を深めることができ、さらに、活発な意見交換によって、今後の交流について具体的な方向を示唆をいただき意義深いものであった。

## 2.5 福祉ニーズ分析

### ① シャローム若葉

第2デイサービスを利用されている方は若い人との交流を楽しみにしているので、短時間でかまわないから、話し相手をつとめてほしい。また、行事を行う際に見守りのような活動をしてくれる人が必要である。

グループホームでは、比較的会話が成立し感情表現も穏やかな方が多い。話し相手になったり、一緒にレクリエーションをすることで、認知症の進行が抑えられると思われる。学生や教員が関わり、刺激を与えることが求められているようである。また、地域社会の一員として、入居者の家族を対象に何らかのサービスが提供できないか、検討する必要があると思われる。

本学の学生が、夏休みに行ったボランティア活動を続けていく方法を考えたい。

### ② 千葉市社会福祉協議会若葉区事務所

地域のニーズ調査の結果は、シャローム若葉や民生・児童委員の報告と同様である。しかし、ボランティア活動をする上では本学の立場を明確にし、学生の活動においても支援体制を整えておく必要がある。また、民生・児童委員を通じての活動であっても、社会福祉協議会の考えを周知しておかなければ、スムーズに進まないことが考えられる。社会資源として、本学を考えてもらうためのアピール方法を検討したい。

### ③ 民生・児童委員の活動から

民生・児童委員が毎年5月に、65歳以上全員と60～64歳の寝たきり状態の方を訪問して実施する健康調査の結果は、高齢者の福祉ニーズを把握する上で、足で歩いて得た情報であり、重要である。同時に民生・児童委員は高齢者以外の福祉ニーズも把握しており、それを知ることが、地域との交流に欠かせないことを知った。

高齢者を含め、小倉地区は戸建て地域と公営アパート地域で福祉ニーズが異なる。戸建て地域では、高齢者が多いが比較的落ち着いており、高齢者については家族がいる場合は家族が世話をし、独居の人は自立してがんばっている人が多い。介護保険制度も活用されている。この地域では、差し迫ったニーズはないが、自立して生きている高齢者も交流を望んでいること、子どもに対する活動をしており、そこへの協力を望んでいることがニ

ズとして挙げられる。

公営アパート4地域は60歳以上の高齢者数は他地域の半分以上と老人が少ない。しかし独居老人の60歳以上に占める割合はそれ以外の地域が3.7～9.5%であるのに比べ公営アパート4地域のうち3地域が21～29%と極めて高く孤独死につながる可能性をもっている。また、その他の問題も多い。近所付き合いが少なく、母子家庭、生活保護所帯、不登校児がいる家庭などがあり、その対応に苦慮している。経済・家庭・教育の問題等、福祉の枠を越えたニーズがある。

高齢の親の入院などにより、障害者がいる家庭の問題が顕在化してきており、障害者へのサービスの充実、特に精神障害者への対応についてのニーズがある。

高齢者との交流としてふれあいサロンやいきいきサロンへの本学学生の参加は歓迎されていることは、高齢者の交流のニーズに合致しているといえる。

さらに、今後、地域の活性化と福祉ニーズに応えられることとして、話し合いの中で提案され、賛同を得たことは以下のことである。

地域の高齢者の技を学生が学ぶこと。

友愛訪問に学生が同行すること。

愚痴をきいたり、話を聞いたりすることが民生委員や、元気な高齢者にとって重要な役割になっている。傾聴ボランティアについて公開講座実施。

障害や介護のことについて制度、知識・技術面についてもっと学びたいという希望もあり、本学の教員が提供できるものがあると考えられる。

本学の調理室などの施設利用についても希望があった。また、学園祭の時に本学見学を実施する提案にも多くの賛同があった。

## 2.6 考えられるサービスメニュー ― 地域が求めていることと本学ができることの接点を見出す

インタビューを終えて地域福祉ニーズを知ることと共にインタビューの副産物として発見できたことがあった。改めて、大学から地域へ出て、地域に身をおくことの重要性がわかった。ここではその主なものをまとめてみた。

### ① 小倉地区にある福祉施設との交流

本学から徒歩圏内にある福祉施設のうちシャローム若葉第2デイサービスセンターと併設のグループホームを地域介護福祉専攻1年の全学生とともに見学し、ボランティア活動に向けてのオリエンテーションを受けることが出来た。現在数名の学生がボランティア登録をして継続的にボランティア活動に参加している。

他に徒歩圏内にあるもう一つのグループホームを訪問して関係作りをしていくのも地域交流を継続的に行っていく上での課題である。さらに、御成街道沿いに病院があり、また平成19年度開設予定のグループホームが近隣に位置していることから、今後益々学生が地域の福祉施設に授業の空き時間を使ってボランティア活動をする機会が増やしたい。地域の社会資源との有機的な連携を計画していきたい。

## ② 人的交流計画

地域の中に多彩な人的資源が存在していることがわかった。(例えば、風作り名人・セミプロ歌手・古布を使った小物製作者・その他特技等々) 学生との地域交流の一環として、住民講師による授業を企画することも考えられる。

反対に、本学の教員が地域の市民講座の講師になるなど地域貢献が考えられる。今回も民生・児童委員会の方々が大学祭にお見えになり本校教員との懇談の中で、教員の専門を紹介させていただいた。早速3月の地域パイロット事業に本校の但野教授が招聘された。地域により積極的に本校の教員あるいは調理室や在宅訪問介護実習室のようなハード面の利用ができるように、地域向けリストを製作していくことも今後の課題である。

## ③ 福祉マップ

今回の一連の実踏調査により、自治会単位にいろいろな地域マップがあることを知った。「防災マップ」「高齢者見回りマップ」「交通マップ」「小倉小安全マップ」等である。一つ一つは地域の方が役割遂行に必要なために、手仕事で作られたものであった。地域介護福祉専攻として福祉マップを作成するとしたら、目的と機能を明確にする必要がある。「学生のボランティア先マップ」や「バリアフリーマップ」は住民のためというより本学の地域活動のためである。なぜならば、小倉町内では「バリアフリーマップ」の需要は少ない。車社会のためである。

## ④ 公開講座

地域は住民の生活の場であり、地域作りはそこに暮らす人々の生活を活性化するため、ひいてはそれが地域住民の福祉の向上に資するために行うものである。そのため、地域内には種々の組織が存在している。今回本短大と望ましい地域交流のあり方を探索するためにインタビューを行ったが、本学の地域貢献の可能性は高いと思われる。しかし、多岐にわたる生活ニーズや福祉ニーズ全てにかかわることは不可能である。今までにかかわってきたことを細く長く継続していくことにより、地域に住するものとしての存在感を示し信頼感を得ていくことが大切である。また、その中から特に高いニーズについて本学が即応



できるものについてはいつでも対応できるアンテナが必要である。

今回、小倉台地区の高齢化率の高いこと、戸建てが多く高齢者は引きこもりがちであることが再認識された。高齢者相互が話し相手になる「シルバーピアボランティア養成講座」等の開催などは地域の比較的高いニーズに即応できるプログラムであると思われる。

#### （付設）小倉地区地域のニーズ

- ・生活課題ニーズとして以下の種類が考えられる。
    - 高齢者世帯の生活課題の例として、ゴミの日のゴミ出しであるとか引きこもり孤立化・孤独化。
    - 高齢者世代に限らず、児童の健全育成や登・下校の見守りなど。
    - 障がいのある子どもの居場所作りや自立した生活実現のための支援など
  - ・福祉教育・人材育成・相談・情報提供ニーズ
- などに分類して考えられるが若葉区地域福祉計画に詳しい。

### 3. 高齢者と若者との共同事業開発

#### 3.1 はじめに

高齢者と若者との共同事業への取り組みは、ことぶき大学校生の卒業論文がきっかけである。

「高齢者時代を過ごす途」と題された論文は、①再就職の途 ②生涯学習の途 ③健康、体力増進・維持 ④ボランティア ⑤趣味、娯楽、友愛 ⑥介護保険施設・福祉施設等の6項目からセカンドライフに必要な情報がまとめられていた。高齢者のニードは、想像より活動的であり、いかに私たちが捉えていた高齢者に偏りがあったか思い知らされた。

その事実から、高齢者のニードに敏感でなければならない学生にとって、高齢者とともに時間を共有することが必要であり、かつ大切だと考えられるため、論文作成者のH氏に主旨を説明したが、H氏は大学校卒業のため在学生のC氏を紹介され、今後の共同事業について検討していくことになった。

#### 3.2 経過報告

- ・第1回打ち合わせ：平成18年5月23日（於本校；C氏、布施、松本、清宮）  
ことぶき大学校生福祉健康学科のC氏と打ち合わせを行う。  
共同事業の目的、取り組む内容案を示し、意見交換をする。  
他のことぶき大学校にも意見を聞くこと。協力を求めるチラシを作成した。
- ・第2回打ち合わせ：平成18年6月6日（於ことぶき大学校；C氏ほか、ことぶき大学校自

治会役員の方々、布施、清宮)

共同連携に向けてどのようなことができるかの意見交換を行った。美術学科のA氏から、絵画作品展示活動についての提案があった。クラブ活動への参加の提案もあった。

・学生への働き掛けについて(平成18年6月15日)

1・2年生に対して、高齢者としていたいことについての呼びかけを行った。

1年生：人生経験を聞きたい。盆栽。書道。ダンス。遊び(昔の)カードのゲーム。

スポーツ(卓球、テニスなど)着付け、和裁縫。華道、茶道。三味線。

2年生：スポーツ(ドッチボールなど)。折り紙。遊び(竹馬など)。植物を育てる。

音楽(ギターなど)

また、2年生にことぶき大学校のサークル活動参加について尋ねてみたところ、以下のよう  
な結果であった。

実際の活動参加についてであるが、ダンスサークルに4名の2年生が参加、歴史散歩クラ  
ブ9月例会「小江戸・川越散歩」に3名の1年生が参加している。

項 目	Aクラス		Bクラス	
料 理	男	3人	男	1人
	女	5人	女	2人
社交ダンス	男	0人	男	0人
	女	0人	女	7、8人
囲 碁	男	0人	男	2人
	女	0人	女	0人
歴 史 散 歩	男	2人	男	0人
	女	0人	女	12人
ゴ ル フ	男	3人	男	3人
	女	0人	女	4人

・絵画作品展示活動への参加の促し(平成18年7月18日：(於本学；本学学生1年生有志(15名)、布施、清宮)

絵画作品展示活動に協力が得られるだろうと考えられる学生に声をかけ集まってもらい、共同活動の趣旨、概要を説明すると同時に、ことぶき大学校での顔合わせ日時等の説明をする。

・第3回打ち合わせ：平成18年9月13日(於ことぶき大学校；美術学科学生、本学学生1年生有志、布施、清宮)

ことぶき大学校生と本学学生との初顔合わせを行った。絵画を飾る施設ごとにグループ分けをして、今後の連絡の取り方を確認する。特別養護老人ホーム3箇所(中野園、昌晴

園、セイワ若松)に協力依頼し、了承を得る。

#### 絵画展示活動の状況

- ・中野園：担当の本学学生が、ことぶき大学校生と連絡を取り、絵画の搬入展示の日時を調整しながら、結果11月と2月に絵画を搬入。(別紙4)
- ・昌晴園：担当学生は施設を訪問、ことぶき大学校生と何度か連絡をとったが、お互いのスケジュールが合わず、絵画の展示に至っていない。
- ・セイワ若松：担当の学生が、ことぶき大学校生と何度か連絡をとったが、お互いのスケジュールが合わず、絵画の展示に至っていない。
- ・第4回打ち合わせ：平成19年3月13日(於本学：ことぶき大学校新旧自治会役員5名、伊藤教務課長、植草講師、布施、清宮)

平成18年度の共同事業の実施状況と平成19年度の予定について話し合いを行なった。本学から新規講座「地域にいきる」の協力とアクティビティ講師依頼をした。

### 3.3 成果と課題

ことぶき大学校生と本学の学生との共同事業であるが、初年度ということもあり、事前に教員が思い描いていたようには活動が展開しなかった。その理由としては、以下のような点があげられるだろう。

- ・本年度クラブ活動参加に関しては、ダンスサークルと歴史散歩クラブに各1回ずつの参加であった。絵画作品展示活動も1箇所のみの実施に終わった。
- ・本学のカリキュラムとことぶき大学校のカリキュラムが合わずうまくいかなかった。
- ・展示先までの交通費の問題がある。
- ・ことぶき大学生、本学学生ともに2年課程のため、活動の継続性に問題が生じた(工夫が必要)。

### 4. 「地域に根ざした介護福祉士養成の試み」に関する考察

これまでに本学地域介護福祉専攻所属教員が、学内のみの教育だけではなく、近隣やもう少し広い意味での地域を意識して取り組んできたことの意義と課題について、本研究を通して改めて整理を試みることにしたい。

まず、「若葉地区における老人世帯の福祉ニーズの実態調査とサービスメニュー開発」についてであるが、本学の近隣エリアに対しての実態について、統計データや福祉サービス提供事業所職員や社会福祉協議会職員、また地域福祉推進委員、民生・児童委員へのインタビューを通して、この地域の抱える福祉ニーズを把握しようと試みた。その結果をもとに、本学が取り組むことができる課題を見出そうとした。

福祉サービス提供事業所職員へのインタビューからは、職員が本学卒業生ということもあるが、デイサービスセンターおよびグループホーム利用者と学生とのふれあいができないか、というニーズがあり、1年生全員が施設見学およびボランティア活動のオリエンテーションを受け、その後数名の学生が継続的にボランティア活動を行っているなどの成果があがっている。

また近隣のある地区では、「御成街道を歩く会」、わらじ作り、凧作り、新聞を使ったブローチづくりなどさまざまな地域活動が展開されていた。学生は在学中学外実習を経験するが、ここでは支援の必要な障がい者や高齢者が直接的な対象となる。この学外実習での経験も介護福祉士の養成にとって大変重要であるが、加えて地域を意識し、近隣住民との関わりを念頭に、これらの特色ある地域活動に学生が参加することも、「地域に根ざした介護福祉士養成」を目指す場合、ひとつの有効な方法であると考えられるため、来年度以降、その活動を担っている人たちとの連携を働きかけ、学生の体験事業化していく予定である。

加えて民生委員・児童委員による友愛訪問の際の学生同行についてであるが、本学が位置している小倉地区を中心に、民生・児童委員定例会合等に参加する中で、今後の学生の同行の可能性について検討していく必要がある。

東南地区の「ふれあいサロン」では、地域の「元気」な高齢者とのふれあい体験を学生が行っている。これは授業の一環としてすでに組み込まれているが、今までの経過から今後も継続していくことが望ましいだろう。

民生・児童委員との懇談会も行ってきたが、それを通して、各地域の特徴や現状報告および意見交換を行う中で、本学が地域とともに、地域のためにできることを探り、実行していきたい旨の共同研究についての説明を行ってきた。その結果、大学祭への参加と見学会の開催を実施し、また専任教員による出前講座も実施することができている。今後の連携の足がかりができたのではと考えられる。

だが、以上の活動は千葉市社会福祉協議会若葉区事務所との連携を抜きにしては考えられない。民生・児童委員による活動や住民による地域活動等に若葉区事務所は深い理解と継続的な支援を行い、地域福祉の拠点となっていることは明らかである。本学の近隣地域への姿勢を常に伝え、連携していくことが不可欠である。

「高齢者と若者との共同事業開発」についてであるが、あることぶき大学生の卒業論文から、高齢者のニーズが想像以上に活動的であり、そのニーズに常に敏感であるためには高齢者との時間の共有が不可欠であるとの考えからスタートしている。

ことぶき大学校生と数回にわたる打ち合わせを行う中で、ことぶき大学校生によるクラブ活動への参加と福祉施設等への絵画作品展示活動について、共同で行うことになった経緯と経過については前章にてまとめられているとおりである。

クラブ活動への参加についても、結果的にはことぶき大学校生と本学学生との時間と場所の

調整がうまくつかず、結局2回の参加にとどまっているという点と、絵画展示活動についても、場所を3箇所確保したにもかかわらず、結局1箇所（2回）のみの絵画の展示に終わっている。

だが、今年度のことぶき大学校生との打ち合わせと本学学生のクラブ活動参加を通して、限られた人数の学生ではあったが、参加することによって学内の学生生活からは得られないことを経験できたように思われる。それらは、「よい雰囲気の中で楽しめた」「また参加したい」「異世代交流の楽しさを経験することができた」などの学生の感想から推察することができるだろう。

これらの成果と課題をもとに、ことぶき大学生との連携をさらに密にし、活動を展開していく予定である。

また「若葉地区における福祉ニーズの現状とサービスメニュー開発」と「高齢者と若者との協同事業開発」に加え、新入生が2年間の学びの理解を助けるための視覚的なデータを蓄積している。入学時から卒業にいたるまでの主要な活動を、DVカメラを使った映像やデジタルカメラ等を用いた画像データを収集中である。

具体的には、入学式から始まり、「学友会総会」、2年生による「新入生歓迎行事」、「卒業生のお話を聞く会」、「就職内定報告会」等の、いわゆる学内で完結する行事に加え、学外者や近隣地区の協力を得ながら実施している行事も多く含まれている。例としては、アクティビティサービスの授業におけることぶき大学校生によるボランティア講師として協力や、授業の一環としての近隣地区の「ふれあいサロン」等への参加活動場面、また本学2年生全員とことぶき大学校生との交流会などである。

これらは「地域に根ざした介護福祉士養成」を目指していくために、本専攻教員が試行錯誤しつつ取り組んできたものである。それをただ単に言葉のみを用いて学生に説明するのではなく、映像や画像を通して1年生が入学した時点から、2年間の経験を可能な限りイメージでき、また学びのプロセスを一人ひとりが組み立てていくためには効果的であると考えている。

現時点ではまだデータの蓄積の状況であるが、今後これらのデータを整理編集し、学生に示していく予定である。

以上、本研究は単年度において実施されたもののみならず、これまでの本学における介護福祉士養成の過程で見出されてきた、これからの介護福祉士養成に必要と考えられる教育プログラムの拡充と新たな開発を目指してきた。今年度の研究成果を通して、前述した課題と方向性も明らかになりつつある。この成果をもとに、今後も継続して研究および実践を行っていく予定である。

\* 本研究は平成18年度植草学園短期大学共同研究費の支給を受け、実施したものである。